

『自閉症の倫理学』日本語版への序文

D.R. バーンバウム（ケント州立大学）

翻訳：永田伸吾（金沢大学）・相川隆行（金沢大学）

私の弟、マイケルは、生まれたときからふつうとは違っていました。私たち家族にはそれがなぜだか分かりませんでした。彼に対する強い拒否感の一部は、分からないということから来るものでした。家族は、彼を普通の学校に入学させました。というのは、私たちは、彼が同じ年の他の子どもたちに劣ることを決して認めなかったからです。私たちに励まされ、彼は、姉たちや両親と同じように大学に行きたいという強い願いを抱くようになり、6年という長い歳月をかけてようやく学位を取得しました。彼が育ったのは、ほとんどの人が自閉症について何も知らなかった時代です。自閉症という診断は減多に下されず、そういう診断が下されても、それが何かは謎めいたままでした。確かにそれは私たち家族にとっても謎めいたものでした。弟がふつうとは違っていることは良く分かっていたのですが、なぜなのかははっきりしなかったのです。

その違いというのは複雑で、説明しがたいものでした。マイケルは大学を卒業しましたが、ジョークを理解できませんでした。彼は仕事に就き、自分のアパートに住みましたが、車を運転することはできませんでした。彼は、地域の行事に熱心でしたし、ボランティアにも積極的で、いつも慈善団体のために働いていましたが、彼と30秒も話をすれば、彼がふつうに育ったたいいの人とは違うということがすぐに分かるのでした。彼はかつて大学の食堂での仕事を失ったことがあります。それは、ある夕方、皆が出て行った後で、キッチンが恐ろしく混乱していることに彼が気づいた時のことでした。彼は夜遅くまで一人で働き、すべてを整理し直し、仕事の出来栄に満足して出て行きました。彼が解雇されたのは翌朝です。早番の担当者が朝食を用意できなかったのは、新しく整理されたキッチンでは何も準備ができなかったからです。彼がついに自閉症だと診断された時、全体像がはっきりしてきました。それによって一つの診断名、一つの診断基準が与えられ、私たちと彼に、彼が何者であるかを告げたのでした。

しかし、「自閉症」という診断は十分ではありませんでした。彼が自閉症であるということを知ることと、自閉症が何であるかを知ることとは、異なるものです。そのため、私はもっと詳しくそれを知ろうとしました。サイモン・バロン・コーエンの著書、『マインド・ブラインドネス：自閉症と心の理論についてのエッセー』が1995年に出版された時、より完全な全体像が見えてきました。バロン・コーエンの主張は、自閉症は「心の理論」の失敗によって特徴づけられる、というものでし

た。自閉症者は、自分の心的状態と異なる心的状態を他の人々が持っていることを理解できない、
というのです。もしバロン・コーエンが正しければ、マイケルは他の人々の信念や意図、欲求や願
望に十分には気づいていなかったこととなります。彼にとって、他の人々が何を考えているかを考
えることは、困難だということです。彼は思いやりがあり、誠実で優しいのですが、他の人々から
見て失礼だとか我がままだとかと思われるようなことをしでかしそうな場合には、はっきりと彼に
そう教えてやる必要がありました。キッチンを整頓し直すことを彼がよく考えなかったのも、無理
はありません。すべてがどこに収められているかということについて同僚たちにも彼ら自身の考え
があるということや、また、同僚に何も言わずに彼独自の整理の仕方を実行したら混乱が生じるだ
ろうということは、彼、マイケルには決して思い浮かばないことなのであります。

私は、一つの鍵を手にし、それによって初めて私の弟に関する秘密を解き明かしたのです。哲学
者にとって最も興味をそそられるのは、その鍵が心理学的な含みを持つだけではなく、哲学的な含
みをも持っていたことでした。結局のところ、倫理的な問いとは、私たちがどのように他の人々
を扱うかを問う時にしばしば生じてくるものです。私たちがどのように人々を扱うかは、私たちが
どのように彼らを理解するかにかかっています。もしマインド・ブラインドネス説が主張するよう
に、自閉症者と非自閉症者との間で互いについての見方が異なるのだとしたら、このことは倫理学
全体の景観を変えるでしょう。本書『自閉症の倫理学：彼らの中で、彼らとは違って』は、そのこ
との理解から書き上げられました。私の弟の行動に関するそこでの説明は、心理学的な説明を提供
するだけでなく、倫理的な試練をも提起しています。私の願いは、本書がその試練に応える最初
の一步となってくれることです。

2008年の夏の終わりに本書のオリジナル版が出版されて以来、私は世界各地の自閉症の人たち
と会う機会を得ました。私はこれまで以上に、本書の結論、すなわち自閉症者には自閉症的完全さ
の権利がある、つまり「完治（治癒）」されずに自分の人生をおくる権利がある、という主張が正し
いことを確信しました。本書は、自閉症的完全さを支持する一つの議論、すなわちマインド・ブラ
インドネス説から引き出される一つの議論を提供するものです。しかし、2008年以降、私は少し見
方を変えました。自閉症のユニークな特徴群は、実にさまざまな点で自閉症的完全さを支えている
のです。マインド・ブラインドネスは一つの出発点にすぎない、ということを最近の自閉症研究の
進展が示してくれました。

本書の出版以来、私は、多くの自閉症の人たちに出会ったことに加え、熱心で才能豊かな日本の
研究者や通訳者の方々に巡り会いました。彼らが、本書の日本語版を実現してくれたのです。第一
に、金沢大学の井上教授に感謝しています。彼が最初に本書を見出し、日本語への翻訳を私に強

く求めてきました。私は、光栄なことに、大井教授に二度にわたって金沢大学に招かれ、二度とも、とても楽しい時を過ごさせてもらいました。同じく金沢大学の柴田正良教授は、挑戦的な哲学議論を仕掛ける対話者であると同時に、思いやり深いホストでもあるという役を務めてくれました。柴田教授の哲学的明晰さは比類のないものでした。素晴らしい通訳の才能に恵まれた重松加代子さんを独り占めできたことは幸運でした。二度に渡る金沢滞在中の通訳を務めて頂いたことと同様に、彼女が本書の翻訳に果たした役割に対しても、格別の感謝の気持ちをここに記しておきたいと思います。彼女の才能は語学に留まりません。彼女は目利きの確かな文化大使でもあるのです。金沢大学のポストドク研究者、永田伸吾さんと哲学専攻の大学院生、相川隆行さんのお二人の留学を、ケント大学で引き受けることができたのも嬉しいことでした。私が彼らから学んだのと同じくらい、彼らが私から学んでくれることを願っています。最後に、大井教授からの『自閉症の倫理学』日本語版の出版依頼を受け入れてくださった勁草書房に、感謝申し上げます。

日本の読者は、ほぼ四十年前の私の家族とは違う視点から、自閉症を見ることができます。自閉症についてはまだ学ばねばならないことが沢山ありますが、自閉症を認識することは前より容易になり、またよく理解されるようにもなりました。まだとうてい十分とは言えませんが、自閉症の子どもも大人も、以前より多くの助けをあてにできるようになりました。自閉症児の親は、かつてほど孤立してはいません。自閉症については解明すべき多くの課題が残っています。私は、自閉症の倫理的課題を探究することによって、自閉症の謎がより理解できるようになることを願っています。